犯即チ不正ノ損害タルニ過キサルトキハ通常三十年ノ永キ期間ヲ經過スルニ非スンハ時効ニ依リテ消滅スルコトナシ法律ハ保護スヘキモノヲ保護セス却テ保護スヘカラサルモノニ對シ保護ノ度ヲ過シタルモノヽ如シ然ルニ佛其他各國大抵私訴ノ時効ノ期間ヲ公訴ト同一ニセリ是レ公益上止ムヘカラサル理由ノ存スルアレハナリ公訴ノ時効ニ因リ犯罪ノ消滅シタル所爲ニ對シ私訴ヲ起ストキハ犯罪事件カ裁判所ニ顯ハルヽカ故ニ之ヲ罰セントスルモ既ニ時効ニ罹リタルモノナルヲ以テ之ヲ罰スルヲ得ス此ノ如ク社會公權ノ罰スルコトヲ得サル事件裁判所ニ顯ハルヽニ至リ裁判所ノ威嚴ヲ失スルニ至ルヘキナリ是レ其主タル理由ナリトス尚ホ一ノ理由アリ凡ソ犯罪事件ニ付キ有罪ヲ必罰シ以テ刑法ノ目的ヲ達スルニハ被害者ヲシテ早ク其事件ヲ社會ニ知ラシムルノ途ヲ開カサル可カラス然ルニ私訴ヲ通常民事ノ時効ノ如ク長カラシムルトキハ勢ヒ等閑ニ付シ去ルニ至リ爲メニ社會ハ早ク犯罪ヲ知ルコトヲ得ス又之ヲ知リタル當時ハ既ニ証據ノ湮滅ヲ來スカ如キ恐レアリ故ニ私訴ノ時効ヲ公訴ノ時効ト同一ナラシメ以テ被害者ヲシテ速ニ告訴又ハ私訴ヲ爲シ其事件ヲ官衙ニ知ラシムルノ途ヲ設ケタルナリ

ボアソナード氏ハ舊治罪法草案ニ註釋ヲ下シテ曰ク公訴ハ主タル訴ニシテ私訴ハ從タル訴ナリ而シテ從ハ主ニ從フハ一般ノ原則ナレハ公訴附帶ノ私訴ハ公訴ノ時効ト共ニ消滅セサルヘカラスト氏ハ證據湮滅ヲ以テ時効ノ一理由ナリトスル論者ナルヲ以テ又此理由ヲ引用シテ私訴ノ時効ヲ公訴ノ時効ト同一ナラシメタル一理由ナリトセリ然レトモ證據湮滅ヲ以テ私訴時効ノ理由トナスヘカラサルハ嘗テ論シタル如クニシテ又從ハ主ニ從フトノ原則ヲ此ニ採用シ來リタルモ亦全ク之ヲ贊成スルヲ得ス何トナレハ私訴ハ獨立シテ民事裁判所ニ此訴ヲナスコトアレハナリ然リ而シテ舊治罪法ニハ私訴ハ別ニ民事裁判所ニ之ヲナスコトヲ得トアリシカ新刑事訴訟法ニハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲナシタルトキト雖モ公訴ノ時効ト其期間ヲ同フストノ文字ト取替ヘタリ然レトモ其意味ニ至テハ異ナルコトナシ何カ故ニ此場合ニ於テモ公訴ノ時効ト同一ナラシムルヤ是レ亦公訴私訴同時ニ刑事裁判所ニ起リタルトキ私訴ノ時効ヲ公訴ノ時効ニ罹ラシムル理由ト異ナルコトナク即チ既ニ罰ス可カラサル

犯罪カ裁判所ニ顯ハルヽニ至レハナリ且時效ノ期間ハ訴ノ性質ヨリ來ルモノニシテ裁判所ノ管轄ノ異リタルカ爲メ變更ヲ來スヘキモノニアラサルナリ

此ニ注意スヘキハ公訴ノ時效ト同一ノ期間ニ從ハシムルハ私訴即チ損害賠償ノ訴ナラサルヘカラス故ニ假令犯罪ニ基因シタル訴ナルモ離婚ノ訴又ハ相續權排除ノ訴ノ如キハ此內ニ入ラサルナリ而シテ苟モ私訴ナルトキハ何人ニ於テモ此規則ニ從ハサルヘカラス即チ被告人ニ對シテ其訴ヲナス場合ハ勿論民事擔當人ニ對シテ私訴ヲナス場合モ亦之ニ從ハサルヘカラサルナリ然レトモ民事擔當人ニ對スル場合ニ於テハ多少ノ議論ナキ能ハス元來民事擔當人タル幼者ノ後見人、父又ハ母、敎師、親方等カ損害賠償ノ責ニ當ルハ自己ニ監督ヲ怠リタル過失アルカ故ナリ而シテ此過失ハ犯罪ニ非スシテ所謂民事上ノ准犯罪ナリ果シテ然ラハ民事擔當人ニ對スル損害賠償ノ訴ハ通常民事ノ規則ニ從フヘキモノニアラスヤ眞ニ然リ然レトモ私訴ノ時效ヲ公訴ノ時效ト同一ナラシメタル理由ハ時效ニ因リテ一旦消滅シタル犯罪ノ裁判所ニ顯ハルヽヲ避クルニ在ル以上ハ民事擔當人ニ對スル場合ニ於テモ亦同一ナラサルヘカラサルナリ

因是觀之犯罪人ノ相續人ニ對スルトキモ亦同一ナルヘキナリ

又苟モ訴ノ性質カ私訴即チ犯罪ニ基因シタル損害賠償ノ訴ナルトキハ假令被害者カ通常民事ノ如キ名義ヲ付シテ訴ヘ出ルモ私訴ト看做シ公訴ト同一ノ時效ニ罹ラシメサルヘカラス例ヘハ證書ノ無效ヲ求ムル民事ノ訴ハ其實詐欺取財又ハ證書僞造ニシテ犯罪ヲ成ストキ若クハ過失ニテ器物ヲ毀壞シタリトテ損害賠償ノ民事ノ訴ヲ爲シタルニ其實故意ニ器物ヲ毀壞シタルモノニシテ犯罪ヲナストキノ如シ是等ノ場合ニ於テハ假令相手ニ於テ時效ノ抗辯ヲナサヽルモ裁判官其職權ヲ以テ之ヲ主張セサルヘカラス又被告人モ其抗辯ヲナシテ訴ヲ却ケシムルヲ得ヘシ

何人ト雖モ自己ノ惡事ヲ主張スルコトヲ得ス

是レ理ノ觀易キカ如クナルモ多少疑ナキ能ハス何トナレハ何人ト雖トモ自己ノ惡事ヲ申立テヽ自己ノ權利ヲ主張シ又ハ自己ノ義務ヲ免カルヽヲ得サルモノナレハナリ是レ羅馬以來存スル處ノ原則ナリ今原告人ハ通常ノ民事トシテ訴ヲナシタリ然ルニ被告人ハ刑事ニシテ刑事ノ時效ニ從フヘキ者ナルカ故ニ時效ヲ經タルモノナリト主張シタルトキハ自己ノ惡事ヲ主張シテ自己ノ責任ヲ免カルヽモノニアラスヤトノ疑ヲ生スルナリ

然レトモ右ノ場合ハ此原則ニ矛盾スルモノニアラス其理由ハ第一此場合ニ於テハ被告人躬ラ自己ノ犯罪ヲ主張スルニアラス只原告人ノ謂フカ如ク犯罪タル可キ事實ナリトスレハ既ニ時効ヲ經タルモノナリト謂フモノナレハナリ第二被告人ハ私訴ニ非スシテ刑事ノ訴訟ヲ起サレタルトキハ時効ヲ經タルコトヲ主張スルコトヲ得然ラハ私訴ニ付テ既ニ時効ヲ經タルコトヲ主張スルモ自己ノ悪事ヲ主張スルモノニ非サルナリ第三裁判官モ亦刑事ノ訴訟ヲ受理シタルトキ職權ヲ以テ時効ヲ經タルノ故ヲ以テ之ヲ却下スルコトヲ得然レハ此同一ノ時効ヲ主張シテ其訴訟ヲ免カレントスルトキ之ヲ却下シ得サルノ理由ナカルヘシ第四若シ此場合ニ於テ自己ノ悪事ヲ主張スルヲ得ストノ原則ニ抵觸スルモノトセハ私訴ヲ刑事ニ附帶セスシテ別ニ民事裁判所ニ訴フル場合ニ於テ常ニ之ニ抵觸スルモノト謂ハサルヘカラス從テ私訴ニ付キ時効ノ抗辯ヲナスコトヲ得サルニ至ルヘシ第五若シ此原則ニ遵フノ故ヲ以テ却下スヘキモノトスルトキハ既ニ時効ヲ經タル私訴ニテモ其訴ノ名義ヲ變スレハ必ス受理セサルヲ得ス從テ訴訟ヲ受理セシムルト否トハ原告人ノ自由ト爲ルニ至ルヘシ

前原則ニ觸ルヽ場合

故ニ此場合ノ如キハ決シテ右ノ原則ニ抵觸スルモノニ非ス

然ラハ如何ナル場合ニ此原則ノ適用アリヤ這ハ僅カノ差異ニヨリテ抵觸スルコトアリ即チ時効ヲ經タリト云フヲ得サル場合アリ夫ノ原告人カ刑事ニ觸レタル事實ナルコトヲ主張セス純粹民事ノ訴トシテ訴ヘタル場合ノ如キ是ナリ此場合ニ於テハ被告人ハ刑事ノ事實ナルコトヲ主張シ既ニ時効ヲ經タリトノ抗辯ヲナスヲ得ス例ヘハ原告人ハ寄託契約ヲ原因トシテ物品ノ取戻ヲ訴ヘタルニ被告人ハ其物件ハ費消ニ罹リ所謂費消罪ヲ犯シタルモノニシテ費消罪ハ三年ノ時効ナルカ故ニ其私訴即チ物件取戻ノ訴ハ既ニ時効ヲ經タリト主張スル場合ノ如シ是レ自己ノ悪事ヲ主張スルモノナルヲ以テ其責任ヲ免カルヽヲ得サルナリ

私訴ハ既ニ時効ヲ經ルモ尚ホ民事ノ訴ヲ起スコトヲ得ル場合アリヤ

若シ原告人カ犯罪ヲ根據トスルニアラスシテ原告人カ從來有スル權利ヲ根據トスル場合即チ私訴トシテ訴フルニ非サルトキハ時効ノ適用之アラサルナリ例ヘハ受寄財物費消罪ニ付キ既ニ其私訴ノ時効ヲ經タル後原告人カ寄託契約ヲ根據トシテ物件ノ取戻ヲ訴ヘタル場合ノ如シ此場合ニ於テハ原告人ハ二個

被害者無能力ナルトキト雖トモ私訴ノ時効ヲ中止セサルノ理由

ノ權利ヲ有スルカ故ニ私訴ハ既ニ時効ヲ經ルモ契約ヲ根據トスル民事ノ訴ハ未タ時効ニ至ラス即チ三十个年間ハ起訴スルコトヲ得又犯罪ヲ理由トシテ犯罪ニヨリテ失ヒタル物件ノ返還ヲ訴フルハ私訴ナリ而シテ其私訴ノ既ニ時効ヲ經タル後從來存スル所ノ所有權ヲ根據トシテ其取戻ヲ訴フルトキハ民事ノ時効ニ從フヘキモノナリ又私訴ニアラサルノ故ヲ以テ民事ノ時効ヲ適用スルコトアリ夫ノ姦淫ヲ理由トシテ離婚ヲ訴フル場合及ヒ加害ノ所爲ヲ理由トシテ相續權排除ヲ訴フル場合ノ如キハ民事ノ時効ニ從フヘキナリ

是レヨリ私訴ノ時効ノ結果ニ付キ一言セン私訴ノ時効ハ公訴ト同一ニシテ公益ノ理由ニ基クモノナルヲ以テ其効果ハ完全即チ絶對的ノモノナリ故ニ被告人カ抛棄シテ之ヲ主張セサルモ裁判官ハ其職權ヲ以テ之ヲ引用セサルヘカラス又何時ニテモ之ヲ主張スルコトヲ得即チ大審院ニ至ルモ尚ホ之ヲ主張スルコトヲ得ルナリ

然リ而シテ通常民事ノ時効ハ被害者無能力ナルトキハ其時効ノ經過ヲ中止スルモノナリ是レ畢竟通常民事ノ時効ハ原告人カ速ニ起訴ヲ爲サヽリシ懈怠ニ基クモノナルカ故ニ被害者無能力ニシテ訴ヲ爲ス能ハサルトキハ時効ヲ中止シ以テ之ヲ保護セサルヘカラス然レトモ私訴ハ同シク民事ノ訴ナリト雖トモ公益ノ理由ニ基クモノナレハ被害者ノ無能力ハ時効中止ノ原由トナルコトナキナリ

然レトモ公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ右ノ例外ニシテ民法ニ定メタル時効ノ例ニ從フモノナリボアソナード氏ハ時効ヲ以テ証據ノ湮滅ニ基クモノナリト論スルモノナルヲ以テ刑ノ言渡アリタルトキハ犯罪ノ事實明確ニシテ証據湮滅スルノ恐ナケレハ時効ヲ長カラシムルモ差支ナシト然レトモ証據ノ湮滅ハ時効ノ重キ理由ニアラス私訴ヲ公訴ト同一ノ時効ニ服從セシメタルハ時効ニヨリ公訴既ニ消滅シタルニモ拘ハラス私訴ニ依リ罰スヘカラサル犯罪事件ヲ再ヒ社會ニ顯ハスニ至ルヲ以テナリ然ルニ公訴ニ付キ刑ノ言渡ヲナシタルトキハ此恐アラサルヲ以テ民事ノ時効ニ從ハシムルナリ

以上ニテ公訴私訴ニ關スル問題ヲ終レリ

犯罪ニ依リ社會又ハ被害者ノ爲メニ生スル訴權ニアラスシテ其他ノ人ニ對シ

被告人ハ告訴人告發人又ハ民事原告人ニ對シテ要償ノ訴ヲ起スコトヲ得ルヤ

テ訴權ヲ生スルコトアリ即チ刑事訴訟法第十三條及ヒ第十四條ニ規定シタルモノ是レナリ其第十三條ニ曰ク「被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ賠償ヲ求ムルコトヲ得、被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖トモ告訴人、告發人、民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ依リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲナシタルトキ亦仝シ、民事原告人上訴ヲナシ敗訴シタルトキハ被告人上訴ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ求ムルコトヲ得、要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ之ヲナスコトヲ得」トアリ

是ニ由テ之ヲ觀レハ被告人カ惡意又ハ重過失アル告訴人告發人又ハ民事原告人ニ對シ其惡意又ハ重過失ヲ原由トシテ損害賠償ヲ求ムルコトヲ得是レ何人ト雖トモ權利ナクシテ他人ニ損害ヲ被ムラシメタル者ハ之ヲ償ハサルヘカラストノ原則ニ基キタルモノナリ而シテ此ニ所謂惡意トハ事實ヲ揑造シテ故ラニ訴ヘタルトキ即チ誣告ノ場合ナリ人ヲ誣告スルトキハ犯罪ヲ組成スルカ故ニ反對ニ被告人カ民事原告人トナリテ訴訟ヲ起スコトヲ得ルヤ當然ナリ又重過失トハ訴ヲナス者カ輕罪ヲ誤認シ重罪トシテ訴ヘタルカ如キハ未タ以テ重過失ト云フヲ得ス少シク注意セハ容易ニ誤認ヲ免カルヽコトヲ得ルニ頗ル疎忽ニシテ無辜ノ人ヲ犯罪人トシテ訴ヘタル場合ヲ云フ例ヘハ人ニ金ヲ託シテ使ニ遣シタルニ其人ノ歸リノ遲カリシ故直チニ費消シタルモノト速了シテ之ヲ告訴シタル場合ノ如シ要スルニ少シク注意セハ明カナル可キニ之ヲ爲サスシテ猥リニ人ヲ訴フルヲ重過失ト云フ其果シテ重過失ナルヤ否ヤハ事實上ノ問題ナレハ事實裁判官ノ決スル所ナリ

右被告人カ訴ヲ爲スヲ得ルハ無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ受ケタルトキハ勿論仮令刑ノ言渡ヲ受クルモ告訴人告發人又ハ民事原告人ニ惡意若クハ重過失アルトキハ損害賠償ヲ求ムルコトヲ得ルナリ何トナレハ過實ノ申立ヲ爲シ被告人ヲシテ長ク未決ノ間ニ苦シマシメタレハナリ例ヘハ過失殺ヲ謀殺トシテ訴ヘタルカ如シ重罪ハ之ヲ輕罪ニ比スレハ其取調ノ手續嚴重ニシテ爲メニ損害ヲ被ルコト大ナリ又民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキ其上訴ノ爲メ生シタル損害ハ被告人ニ對シテ之ヲ償ハサル可ラス是レ民事原告人カ爲ス可ラサル上

訴ヲ爲シ被告人ヲシテ長ク拘留ノ苦痛ヲ受ケシメ損害ヲ被ムラシメタレハナリ而シテ此場合ハ獨リ民事原告人ノミニシテ告訴人又ハ告發人ノ之アラサルハ上訴ヲ爲スノ權アルモノハ民事原告人ノミニシテ告訴人、告發人ニハ之レアラサルカ故ナリ即チ告訴人告發人ハ訴訟關係人ニ非サレハナリ

然リ而シテ右被告人カ告訴人告發人又ハ民事原告人ニ對スル要償ノ訴ハ其被告事件ヲ受理シタル刑事裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得元來要償ノ訴ハ民事裁判所ニ爲ス可キモノナリト雖トモ此場合ニ於テハ刑事裁判所カ既ニ其取調ヲ爲シタルカ故ニ他ノ裁判所ヲシテ之カ裁判ヲ爲サシムルヨリハ頗ル便利ニシテ且正確ナル可ケレハナリ然レトモ既ニ刑事裁判所ニ於テ本案ニ付キ關係ヲ脱離シタル後ナルトキハ要償ノ訴ハ民事裁判所ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得サルナリ

又第十四條ニ依ルニ「被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ判事、撿事、裁判所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡査、憲兵卒ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏、被告人ニ對シ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタル場合ハ此限ニ在ラス」トアリ何人ト雖モ權利ナクシテ他人ニ損害ヲ被ラシメタル者ハ之ヲ償ハサル可ラストノ原則ヨリ云フトキハ判事、撿事司法警察官等カ過失ニ出テ無罪ノ人ヲ長ク牢獄ノ内ニ呻吟セシメタルトキハ被告人ハ之ニ對シテ損害ヲ賠償セシムルヲ得サル可ラス然レトモ他ノ點ヨリ觀察スルトキハ此等ノ者ニ賠償ノ責ヲ負ハシムルヲ得ス人ハ誤ナキ能ハス假令始メ犯罪人ナリトシテ訴ヘタル被告人ト雖モ必ス其犯人ナルコトヲ期スルハ事實上到底能ハサル所ナリ故ニ疑ハシキ者ハ之ヲ取押ヘ之ヲ取調ヘサル可ラス取調ノ末罪ト爲ラサルカ又ハ證據擧ラサルトキハ無罪ノ言渡ヲ爲シ之ヲ放免セサル可ラス然ルニ若シ無罪ノ言渡ヲ爲シタルトキハ勢ヒ司法官ヲシテ活潑ノ働ヲ爲スヲ得サラシムルニ至ルノミナラス一旦訴ヘタル被告人ニ對シテハ自己ノ過チヲ掩ハンカ爲メ無辜ノ者ニ強ヒテ罪ヲ科スルカ如キ弊害ヲ生スルニ至ルハ到底免カレサル所ナリ是レ第十四條ノ規定アル所以ニシテ條理ニ適スルモノナリトス」

然リト雖トモ右但書ノ如ク司法官カ故意ヲ以テ損害ヲ加ヘタルトキ又ハ刑事ニ觸ルヽトキハ被告人ハ之ニ對シテ損害賠償ヲ求ムルコトヲ得ルヤ勿論ナリ

然レトモ司法官カ果シテ故意ヲ以テ爲シタルヤ否ヤハ事實上判知シ得可ラス從テ其適用ヲ爲スヲ得サルニ至ル可キヲ以テ余ハ重過失アリタルトキハ損害賠償ノ責アリト爲シタル方、立法上其宜シキヲ得ルモノト信スルナリ

請フ是ヨリ總則中ニ掲ケタル許多ノ事柄ヲ取集メテ述ヘン

期間ノ計算

第一　期間計算ノ事

期間計算ノ事ハ刑事訴訟法第十五條ニ掲ケタリ一讀ノ下能ク之ヲ明カニスルヲ得ル所ニシテ別ニ述フ可キコトナシ只此刑事訴訟法中ニ時ヲ以テ計算スルモノアリ十二時間、二十四時間若クハ三十六時間ノ如キ時ヨリ時ニ計算スルモノハ即時ヨリ起算ス又日ヲ以テ計算スルモノハ事アリシ初日ヲ算入セス又最終ノ日休暇ナレハ之ヲ計算セサルナリ即チ其法文ニ曰ク「此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ計入ス可ラス但時効ノ期間ハ此限ニ在ラス、一日ト稱スルハ曆ニ從フ」ト又民事訴訟法ニモ全一ノ規定アリ即チ其第百六十五條ニ「期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス」トアリ又第百六十六條ニ「一日ノ期間ハ二十四時トシ一个月ノ期間ハ三十日トシ一个年ノ期間ハ曆ニ從フ、期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セス」トアリ此規定ノアル所以ハ刑事訴訟法及ヒ民事訴訟法中裁判所又ハ訴訟關係人ノ爲メニ期間ヲ定メタル場合頗ル多シ而シテ其期間ヲ定メタル理由ハ裁判ノ延滯ヲ防クト又急速ニ失スルノ弊ヲ防クニ在リ又期間ヲ二十四時間、二日若クハ十日等ニ限定シタルハ別ニ深キ理由アルニ非ス立法者カ適當ト認メタルモノニ過キサルナリ此ノ如ク數多ノ期間アルカ故ニ期間ノ計算ニ付キ一定ノ規則ヲ定メサル可ラサルナリ是レ總則中ニ期間計算ノ規定ヲ爲セシ所以ナリトス然リ而シテ日ヲ計算スルモノニ初日ヲ算入セサルハ何故ナルヤト云フニ初日ハ多ク端日ニシテ全カラス從テ期間ニ付キ利益アル者ノ爲メニハ不利益ナルヲ以テナリ然レトモ夫ノ時効ハ向キニ述ヘタル如ク初日ヲ算入ス是レ畢竟初日ヲ算入スルノ被告人ニ利益ニシテ且時効ハ犯罪ノ終リタル時ヨリ直チニ社會ノ起訴權生スレハナリ

此ニ注意ス可キハ全期日ヲ與フルト云フモ期間ノ最終ノ日ハ全キ一日ト云フヲ得ス何トナレハ上訴ヲ爲スニ當リ夜ノ十一時後ニ上訴ヲ爲サントスルモ裁判所ハ之ヲ受付ケス故ニ必ス裁判所ノ閉廳前ニ爲サヽル可ラサルモノナレハナリ然レトモ上訴期間ノ如ク權利ヲ行フ爲メノ期間ニ非スシテ訴訟上ノ手續ノ爲メニ置ク期間ハ多ク全キ日數ヲ與フルモノナリ例ヘハ刑事訴訟法第二百十五條ニ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少ナクトモ二日ノ猶豫アル可シトアル二日ハ全キ日數即チ四十八時間ナラサル可ラス又第二百五十七條ニ在ル呼出狀ノ送達ト出廷トノ間ニ存スル二日ノ期間ノ如キモ全キ二日ト爲サヽル可ラサルナリ是レ法律ノ正面ナレトモ實際ニ於テハ全キ二日タラサルコトアリ即チ二日ノ猶豫ヲ置カス翌日直チニ呼出スコトアリ而シテ被告人ハ曾テ異議ヲ申立タル例ナシ是レ一日モ早ク取調ヲ受クルハ却テ被告人ノ利益ナレハナリ故ニ裁判所ハ若シ被告人カ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ前ノ呼出ヲ無効ト爲シ更ニ規則ニ從ヒ呼出ヲ爲スノ考ニテ早ク呼出ヲ爲スナリ

又最終ノ日休日ナルトキハ期間ニ算入セス是レ何故ナルカト云フニ被告人ニ對スル一ノ恩典タルニ過キス若シ最終ノ日休日ナルニモ拘ハラス期間ニ算入スルトキハ爲メニ上訴ヲ爲スヲ得サルニ至リ間接ニ上訴ノ權ヲ剝奪スルニ至ル可ケレハナリ然レトモ時効ハ一ノ例外ニシテ最終ノ日休暇ナルモ尙ホ之ヲ期間ニ算入スルモノナリ是レ之ヲ算入スルハ被告人ニ利益ナレハナリ尤モ算入セサルハ最終ノ日休日ナルトキノミ期間ノ始メ又ハ其中間ノ日カ休日ナルモ爲メニ期間ヲ延ハスモノニ非ス又土曜日ハ半日ナルモ尙ホ一日ト爲スモノトス

又一个月ヲ三十日ト爲シタルハ二月ノ如キ二十八日ノ月アリテ曆ニ從フトキハ不公平ト爲ルカ故ナリ一年ハ曆ニ從フト爲シタルハ閏年ニシテ差アルモ僅カ一日ニ過キス故ニ曆ニ從フモノトセリ

又第十六條ニ「此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里每ニ一日ノ猶豫ヲ加フ八里ニ滿タサルモノト雖トモ三里以上ナルトキ亦全シ、島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得」トアリ是レ路ノ遠近ニ拘ハラス常ニ全一ノ期間ト爲ストキハ頗ル不公平ヲ生スルカ故ニ出廷又ハ送達ニ付キ八

里毎ニ一日ノ猶豫ヲ與フ可キモノトセルナリ又島嶼又ハ外國ニ付テハ舊治罪法ニハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ムト規定セシカ明治十五年以來特別法ヲ以テ之ヲ定メタルコトナシ新刑事訴訟法ハ之ヲ裁判所ノ定ムル所ニ任シタリ

又第十七條ニ「此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期限ヲ經過シタルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ可シ」トアリ若シ訴訟行爲ヲ爲スニ付キ期間ヲ定メナカラ之カ制裁ヲ附セサルトキハ訴訟行爲ノ終局ヲ告クルノ期ナキニ至ル可シ故ニ其制裁ヲ定メタルモノナリ而シテ特別ノ場合トハ刑事訴訟法第二百四十七條ニ定ムル所ノ天災其他避ク可ラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタルトキ其正當ノ理由ヲ疏明シタルトキニ限リ尙ホ上訴ヲ爲スコトヲ許シ以テ特別ニ之ヲ保護シタル場合等ヲ云フナリ

第二　書類送達ノ事

書類送達ノ事ハ舊治罪法中ニハ多少詳シク規定シアリタリ然ルニ新刑事訴訟法ニハ此法律ニ明文即チ特別ノ規定ナキトキハ總テ民事訴訟法ノ規定ニ從フトセリ即チ民事訴訟法第百三十六條以下ニ其規定アルヲ以テ其詳シキハ民事訴訟法ニ讓リ此ニ之ヲ述ヘス唯此ニ所謂特別ノ規定トハ普通ノ規定ニ依ルトキハ書記カ送達ノ事ヲ司リ執達吏ヲシテ之ヲ爲サシムルモノナルニ刑事ニ關シテハ令狀ヲ巡查ニ携帶セシメテ本人ニ之ヲ送達セシムル場合等是レナリ

此ニ一言ス可キハ總テ訴訟關係人ハ書類ノ送達ヲ受クル爲メ裁判所々在ノ地ニ住所ヲ有セサルトキハ假住所ヲ定メサル可ラス若シ假住所ヲ定メサルトキハ書類ノ送達ナシト雖トモ異議ヲ述フルコトヲ得ス是レ書類送達ノ便ヲ計リタルモノナリ

第三　書類調製ノ事

書類調製ノ事ハ刑事訴訟法第二十條及ヒ第二十一條ニ規定シタリ條文ニ示スカ如クニシテ別ニ述フ可キナシ要スルニ官吏公吏ノ作ル可キ書類ハ官署公署ノ㊞ヲ捺シ始メテ公ケノ書類タル性質ヲ備フ然レトモ此印ヲ捺スヲ得サルコトアリ即チ出張先キニシテ此印ヲ用ユル能ハサルトキハ其事由ヲ記載ス可キモノナリ

凡ソ訴訟書類ヲ作ルトキハ本人自ラ署名捺印セサル可ラス若シ本人無筆ナル

カ又ハ手ヲ傷シ自署スル能ハサルトキハ官吏公吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可キモノナリ

若シ書換ヲ爲シタルトキハ元ノ字ヲ存シ書キ改メタルコトヲ明カニ爲シ置カサル可ラス又若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印セサル可ラス故ニ此規定ニ背キタルトキハ其增減變更ノ効ナキナリ

本法ト從來ノ法律トノ關係

第四　此法律ト從來ノ法律トノ關係

此法律ト從來ノ法律トノ關係ヲ規定シタル法文ハ第二十二條ナリ此刑事訴訟法ハ其頒布以前ニ犯シタル犯罪ニモ之ヲ適用スルモノナリ故ニ這ハ夫ノ法律ハ既往ニ溯ルノ効力ヲ有セストノ原則ノ例外ト爲ルモノナリ元來刑事ト民事トヲ問ハス總テ訴訟手續ニ關スル法律ハ既往ニ溯ルノ効力ヲ有スルモノナリ何トナレハ改良シタル訴訟手續ノ方法ニ依リテ審判ヲ受クルハ被告人ニ利益ナレハナリ例ヘハ從來ハ上訴ハ三級ナリシカ後之ヲ改メテ二級ト爲シタリトセンニ後ノ法律ニ依リテ二級ト爲ストキハ爲メニ被告人ノ既得權ヲ害スルモノニ非スヤトノ疑起ルモ訴訟手續ニ付テハ被告人ハ既得權ヲ有スルモノニ非ス只其當時ノ法律ニ依リテ裁判セラルヽノ希望ヲ有セシニ過キス加之實際其當時ノ手續ニ依リテ裁判セラルヽヲ得サル場合アリ即チ舊治罪法ニ於テハ國事犯ハ之ヲ高等法院ニテ審判シタリシカ新刑事訴訟法ハ之ヲ廢シタルモノヽ如シ然レトモ其當時ノ法律ニ依リテ既ニ終ヘタル部分ニ付テハ其手續其當時ノ法律ニ違ハサルモノハ新タナル法律ノ爲メニ無効ニ歸ス可キモノニ非サルナリ

本法ト陸海軍ニ關スル法律トノ關係

第五　刑事訴訟法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キモノニ適用スルコトヲ得ルヤ

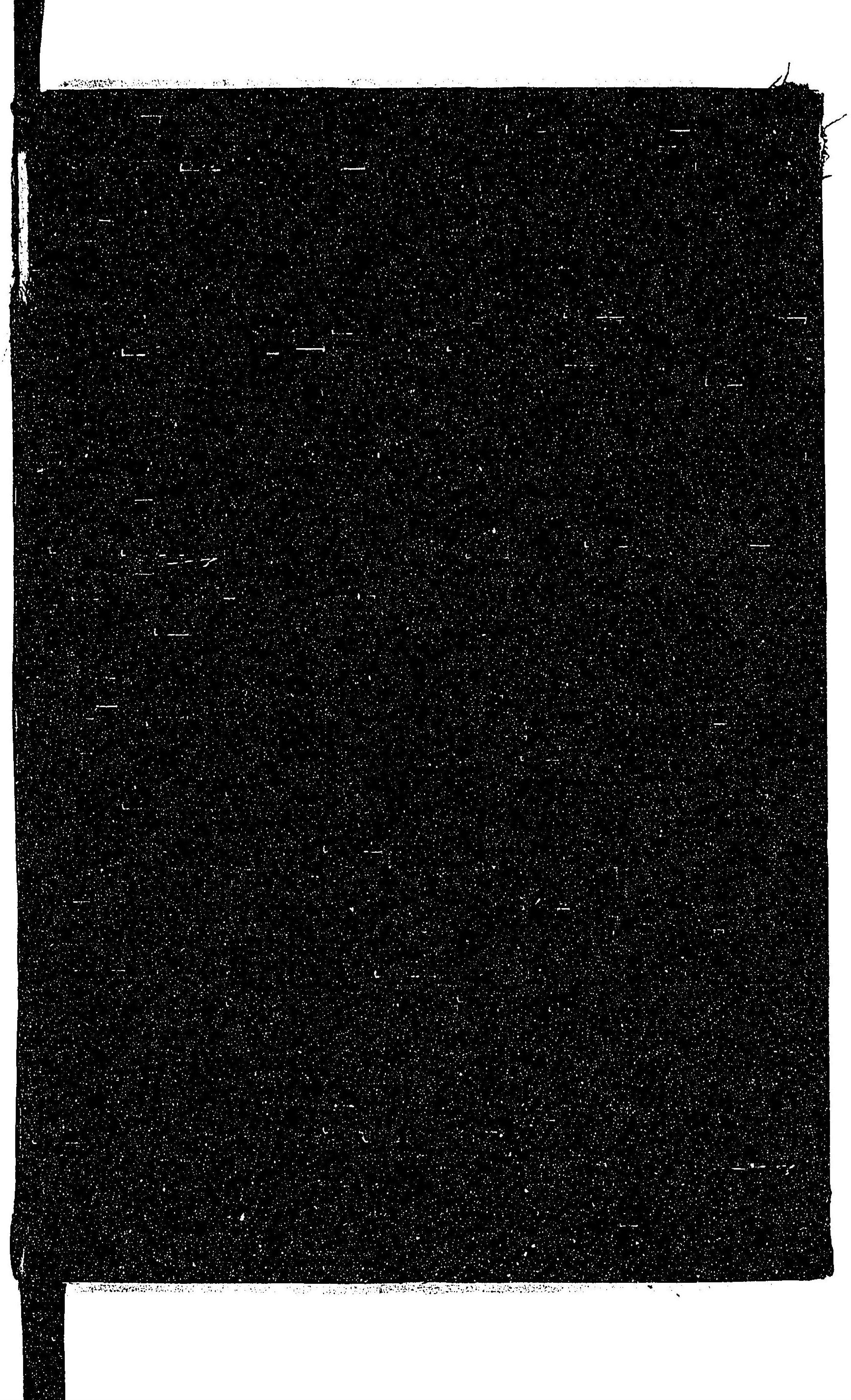
此法ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キモノニ適用スルコトヲ得サルナリ其理由ハ軍事ニハ陸軍治罪法ノアルアリ海軍治罪法ノアルアリ而シテ特別法ハ普通法ヲ破ルノ効果アルモノナルヲ以テ普通法タル此刑事訴訟法ハ特別法タル陸海軍治罪法ヲ以テ處分ス可キ犯罪ニ適用スルヲ得サルナリ

終リニ此刑事訴訟法ニ於テ親屬ト稱スルモノハ刑法第百十四條第百十五條ノ規定ニ所謂親屬ト稱スルモノト同一ナリトス

刑事訴訟法第一編 畢

[illegible]

5



036663-000-2

マ-5

刑事訴訟法 第壹編

寺尾 亨/述

[M27?]

BBS-0082